書評

マーガレット・メール『愛のみならず――一八五〇～二〇一〇年の日本におけるヴァイオリン』

Margaret Mehl, *Not by Love Alone: The Violin in Japan, 1850–2010.*

時田アリソン

Sound Book Press, 2014.

細部まで目配りされたこの本の著者は、明治時代を専門とする経験豊かな歴史学者で、自身も熟練したヴァイオリニストである。本書では、日本におけるヴァイオリンやヴァイオリニスト、そしてヴァイオリン音楽のあらゆる側面について百科辞典的な解説が綴られると同時に、魅力的な文体で理論整然とした叙述がなされている。

今日の世界的に有名な日本人ヴァイオリニスト、そしてヴァイオリン教授法において顕著な影響を及ぼした「スズキ・メソード」に関する話に始まる本書には、十九世紀半ばから二十一世紀初頭にかけて、これらの現象が生じた経緯が記されている。本書の大半は、日本への西洋音楽の導入に関するもので、特にヴァイオリンに焦点をあてている。歴史学者である著者は、要所に適切な概要を挟みながら、音楽に関する説明をより広範な社会背景に関する語りの中に巧みに位置づけている。

メール氏は、次のように主張する。「西洋クラシック音楽は、西洋、ヨーロッパで生まれたという点では「西洋」のものであるが、もう長らくヨーロッパ人だけのものではなくなっている（……）。日本で演奏される西洋クラシック音楽は、西洋で奏（かな）でられるものと同じように聞こえるが、（……）その実、「西洋的」であるのと同じくらい「日本的」である。日本人がいくら西洋音楽をまつりあげ、ヨーロッパの中心地だけがその本場だという信念をいだき続けていたとしても、その音楽は完全に彼ら日本人が自ら作り上げたものなのだ」（p. 6）。

日本の近代化における音楽の役割については、これまでにも語

られることはあったが、メール氏は、一人ひとりの人物に主眼を置くという新たな切り口を見せている。ヴァイオリンの先駆者である姉妹、幸田延（一八七〇―一九四六）と安藤幸（一八七八―一九六三）を紹介し、彼女たちの才能、海外留学、そして延の作曲家としてだけでなく、指導者や奏者としての役割を詳述している。全体的な発展の大きな流れに、一人ひとりのキャスト（山田耕作［一八八六―一九六五］をはじめとする著名人たち）、そして日本国内でさえいまや忘れられたその他多数の音楽家たちの克明な寸描が散りばめられており、こうした人物たちの性格や弱点、また歴史的なゴシップなどに関する活き活きとした詳細な描写を読むことができる。

［日本における］二十世紀初頭のヴァイオリン・ブームは、日本製のヴァイオリンが入手可能になったことや、多数のヴァイオリン講師が広く知られるようになったこと、そして和楽器とヴァイオリンの両方で奏でられるハイブリッドな日本音楽の演奏が積極的に積み重ねられたことにより促されたものであった。

第一次世界大戦後、日本で西洋音楽が受け入れられるようになると、日本が「音楽大国」として浮上するのに十分な関心や専門技術を生み出し、スーパースター（ハイフェッツ、クライスラー、ジンバリストなど）やヨーロッパの亡命音楽家たち（モギレフスキーなど）を呼び込むことにつながったと、メール氏は論じる。その来日したスターたちの多くが、長期にわたり日本に滞在した。交響楽団の成長期に関する一節は、話の焦点が関西へと移されており、東京偏重におちいらないすぐれたものとなっている。

またこの時代は、二人の著名なヴァイオリン指導者が登場した時期でもあった。ヴァイオリン製作の第一人者鈴木政吉の息子であり、スズキ・メソードの考案者である鈴木鎮一（一八九八―一九九八）、そして鷲見三郎（一九〇二―一九八四）である。彼らは戦後著名な音楽家となる子供たちの指導にあたった。国内で育成された神童たちの一人が、三歳からヴァイオリンを習い始めた諏訪根自子（一九二〇―二〇一二）である。一九三七年以降は、海外の有名な音楽家たちの来日演奏旅行がみられなくなり、やがて日本在住の外国人音楽家たちの演奏も許可されなくなったため、国内の才能ある人材にとっての機会が増えることになった。一九三〇年代、および四〇年代に養成された神童たちが、戦後にいたるまでその空白を埋めたのである。

第一部は、戦中をドイツで過ごした日本人音楽家たちに関する説明で締めくくられるが、その大部分が近衛秀麿と諏訪根自子の記述に割かれている。一九四五年、日本大使館員とともにベルリンからオーストリアへ空路で脱出してから、アメリカ軍による救助、アメリカへの移送を経て、一九四五年末に帰国するまでの彼らの軌跡は、本書の第一部の結末を印象深いものにしている。

第二部は、占領下の日本と、音楽生活の再開に関する見事な概説に始まる。戦前、上流階級の楽器とされていたヴァイオリンは、第二次ブームを迎える。ヤマハとカワイの音楽教室が全盛を極め、スズキ・メソードもはじめは日本で、そして後に国際的な成長をみることとなる。また、海外留学は例外というより標準となった。戦後の日本人ヴァイオリン奏者たちは、それ以前の世代の大多数とは異なり、幼少期から演奏を習っている。物語は、驚くほど数多くの豊かな人物描写により、活き活きと語られている。大成功を収めた江藤俊哉（一九二七―二〇〇八）と、同等の才能を持ちつつも悲劇のヴァイオリン奏者であった渡辺茂夫（一九四一―一九九九）との対照的なケースは、日本人のヴァイオリン奏者たちが直面する課題を浮き彫りにしている。国際的なスターである五嶋みどり（一九七一―）とその異父弟である五嶋龍の詳細な一節も組み込まれている。また、別の節では、一九八二年に起きた楽器購入および鑑定書偽造をめぐる贈収賄事件「神田スキャンダル」（芸大事件）について明らかにされている。

最後の第三部には、「ヴァイオリン・ママ」に関する章が収録されている。メール氏は、五嶋みどりの母、そして千住真理子の母（一九五二―）が執筆した本を紹介し、ヴァイオリンの天才を育てるためのあらゆる激務や犠牲、不健全性について批判している。ほかにも、日本のヴァイオリン製作業界の課題、室内楽、アマチュア奏者、そしてシニア層向けの新規市場について考察する章があるが、ここでもやはり多数の人物たちが描かれており、これら全てが本書を魅力的な読み物にしている。

メール氏は、改めて「そもそも日本の音楽とはいったい何なのか？」と問いかけ、本書を結んでいる。映画音楽やポピュラー音楽でさりげなく使われている西洋音楽の専門用語は、まぎれもなく日本で作られた言葉だ。両ジャンルにおいて、「ヴァイオリンは、明らかに近代日本の伝統の一部となった」（p. 405）。同時にヴァイオリンは、「次第にグローバルな音楽文化の一角を担いつつある日本人の物語の重要な要素」（p. 405）でもある。したがって、クラシックとポピュラー、また日本と海外との区別は意味をなさなくなるのである。

本書は、日本の西洋音楽に関する文献の蓄積に加えるべき貴重な研究である。日本におけるピアノやフルート、オルガン、オペラ、オーケストラについても同様の話をすることは可能であり、確かにそのような著作も日本語では存在する。メール氏は、高い研究水準を設け、徹底的に網羅した研究、そして興味深い話を語る能力をみせることにより、この種の研究における、困難であり、しかし挑戦しがいのある研究モデルを示している。

（翻訳：片岡真伊 総合研究大学院大学博士後期課程）

＊本稿は *Japan Review* 29（2016）に掲載された英文テキストの日本語訳である。